

韓国と日本の絵本において、
人間社会の「ソト」はどのように描かれるのか
——「トッケビ」と「鬼」を中心に——

尹 惠 貞*

**How Are the ‘Outsiders’ of Human Society Depicted in Korean
and Japanese Picturebooks ?:
Focusing on ‘Dokaabee’ and ‘Oni’**

YOON Hejeong

In folktales, the lack that arises at the beginning of a story is resolved at its conclusion, as it should be. However, in the Korean picture book ‘Dokaabee’ the lack that occurred at the beginning of the story remains unresolved at the end of the story. In this article, a structural analysis of the story was conducted in order to clarify the reason for this. For the structural analysis, the structural analysis diagram was presented in pairs of two terms, rather than just chronologically arranged, so that it could be viewed in an abstract manner. The Japanese picture book ‘OLD MEN AND THEIR WENS’ was chosen for comparison. The reason for this is that ‘OLD MEN AND THEIR WENS’ features an Oni in Japanese folklore.

Han Byungho, author of ‘Dokaabee’ is known as “Han Byungho of Dokaabee”, and Akaba Suekichi, author of ‘OLD MEN AND THEIR WENS’ is known as “Akaba of Oni”.

Dokaabee and Oni are said to be the “outsiders” of human society, but Han Byungho said described Dokaabee as speaking for the people, while Akaba described Oni as projecting the human mind but being the very environment that surrounds people. As a result of these differences, the differences in nature and characteristics between Dokaabee and Oni are represented in the picturebooks.

キーワード：絵本, 構造分析, トッケビ, 鬼, 韓炳好, 赤羽末吉

Key Words : picturebooks, structural analysis, Dokaabee, Oni, Han Byungho, Akaba Suekichi

* 中央大学政策文化総合研究所客員研究員

Visiting Researcher, The Institute of Policy and Cultural Studies, Chuo University

1. はじめに

アラン・ダンダス（1980：99）は、「民話は、如何にして豊かさが失われたか、あるいは如何にして欠乏が解消されたかを物語るということだけから成り立っていることもある」と述べている。また、関敬吾（1981：170）も同じ趣旨で、「昔話はなんらかの形において、生活の不均衡状態を均衡状態に返し、無秩序に秩序をもたらすことを目的とする」と述べている。しかし、韓国の創作昔話絵本¹⁾『さびしがりやのトッケビ』²⁾（図1-①）における主人公のトッケビは、話の発端で「寂しい」という豊かさが失われた状態や不均衡状態におかれてはいるものの、結末においてもこれは解消されず「寂しい」まま物語が終わる。そうであるならば、ダンダスや関の前述の論に反するのではないだろうか。

そこで、『さびしがりやのトッケビ』の構造を分析し、なぜこのような構造になっているのかを明らかにする。その比較対象として日本の絵本『こぶじいさま』³⁾（図1-②）を用いる。なぜならば、『こぶじいさま』には鬼が登場し、朝鮮のトッケビはよく日本の鬼に例えられるからである。また、『こぶじいさま』に登場する隣のじいさんはこぶが2つになるという却って酷い状態、すなわち、トッケビ同様欠乏は解消されないままの状態で結末を迎えるからである。さらに、『こぶじいさま』は赤羽末吉の画であり、赤羽は「鬼の赤羽」と言われていた。『さびしがりやのトッケビ』を描いたハン・ビョンホも「トッケビのハン・ビョンホ」と言われている。トッケビや鬼は人々の想像上の「もの」であり、人間社会の「ソト」と言えるので、絵本ではどのように表象されているのか、トッケビや鬼の性質を明らかにしながら比較考察するのが本稿の目的である。



図1-①『さびしがりやのトッケビ』表・裏紙



図1-②『こぶじいさま』表・裏紙

図1 絵本の表・裏紙

2. 『さびしがりやのトッケビ』の構造分析

『さびしがりやのトッケビ』は、韓国で2001年〈꼬꼬댁 꼬꼬는 무서워〉(コケッココはコワイ(筆者直訳))というタイトルで、도깨비(トッケビ)という出版社から出版されている。日本の翻訳書誌情報については、注2)で記した。

(1) 梗概

むかし、山奥に寂しがり屋のトッケビ・シムシミ(寂しがり屋の意)が住んでいた。友だちと遊びを探しに村までおりてきた。村の人たちや動物たちもシムシミを見てとても怖がる。しかし、シムシミは遊びたくて、動物たちをつかまえ紐でくくり、ぞろぞろと引き連れて、行進しながら歌う。と、その時、シムシミの肩の上に止まった鶏であるコケッココに突っつかれ、引っつかれ、シムシミは驚いて山奥へと逃げてしまう。村人はこの様子を見て、シムシミが二度と村へおりて来られないように、鶏を集めた。次の日、シムシミはまた動物をつかまえようと村にやってきたが、鶏に会うと思い気をつけていた。しかし、動物が見つからないので納屋まできてみると、鶏がいっぱいた。鶏はシムシミに飛びつき、睨み、突っついたので、シムシミは山奥に逃げ帰り、二度と村においてこなかった。

(2) 構造分析

昔話の始祖であるウラジーミル・プロップ(1983:41-103)の提唱する31種類⁴⁾の機能によって、『さびしがりやのトッケビ』の構造分析を試みる。プロップの規定した機能で分析しただけでは、物語をただ線状的に・時系列的に表すのみに留まってしまうので、A・Jグレイマス(1988:252-266)によって二項から対にまとめ、より抽象的に構造を捉えなおす⁵⁾。また、本絵本においては前述した通り不均衡状態が解消されずに物語が終わるが、この点をグレイマスの「意味」にまで踏み込んで考察すれば、なぜ不均衡が解消されずにそのまま物語が終わるのか、答えが得られると思うからである。

梗概で示したように、トッケビであるシムシミは「寂しい」という「欠如」状態にあった。したがって、友だちと遊びを求めて村へと「出発」するのである。しかし、シムシミと一緒に遊びたい村人や動物たちはシムシミを怖がるので、一応ここで「策略」があったと見ることができよう。怖がるのなら、紐でくくりぞろぞろ引き連れて、シムシミ自身は歌うのであるから、「策略の成功」と見ることができる。だが、鶏の登場という突然の「闘い」にでくわし、驚いて山奥へと逃げる形で「敗北」をすることになる。これに目をつけたのは村人たちで、たくさんの鶏を集める、というシムシミから見た鶏は反対者であ

るので「反対者の補助者の機能」⁶⁾と考えることができるのではないだろうか。翌日、シムシミはもう一度チャレンジするのである。また山奥から村へと「出発」し、しかし誰もおらず、納屋まできてみると恐れていた鶏がたくさんいて、シムシミは大いに「反応」し、またもや山奥へと逃げ帰るという「帰還」を余儀なくされる。

以上が、プロップによる構造分析である。これをグレマスによって、二項から対にまとめると以下の構造分析図（図2）になる。

このように構造分析図を描くことができ、欠如は継続のままなので、あえて点線で両者を結んだ。以下では、欠如状態がなぜ続くのかを考えたい。そこで、グレマスのいう「意味」まで踏み込むが、そのためには行為項（登場人物など）を考えなければならない。

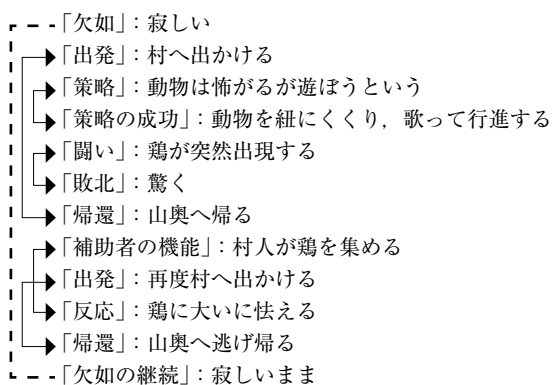


図2 『さびしがりのトッケビ』の構造分析図

(3) 行為項分析

グレマスは行為項（登場人物など）を6つ、主体と客体、送り手と受け手、反対者と補助者に分けている。このように分類するのは、登場人物が何者かを基準とするのではなく、彼らは何を行うかを基準とするからである。とすると、『さびしがりのトッケビ』ではトッケビが主体となっており、客体は主体であるトッケビが望んでいる賑やかさ・楽しさであろうか。客体の賑やかさ・楽しさの送り手はこの物語では実ははっきりしない。また補助者は人間であるが、前述した通りトッケビの補助者ではなく、反対者である鶏の補助者と見るべきであろう。その理由は、トッケビが賑やかさ・楽しさを望んでおり、それを反対する鶏、さらには鶏を集める人間という構図になるためである。

しかし、昔話は口頭伝承であって、人間社会における現実の生活と非現実の生活とを語る。人間社会の生活様式が溶け込み、文化も広く語られている（関1981:198）。したがってトッケビは、前述したように人間の想像上の「もの」、人間社会の「ソト」としての役割を担い、昔話の中に溶けこませたのであろうと考えられる。このように考えるのであれ

ば、『さびしがりやのトッケビ』のシムシミを物語の中の「反対者」と考え、人間が「主体」であり、「客体」は変わることなく賑やかさ・楽しさ、もしくは安全とも考えられるだろう。ここでの送り手は、主体である人間自身による努力によってもたらされるものかもしれないし、農耕社会ではお天道さまや信仰的なものから送られるものかもしれない。その恵みを受けるのは人間であり、補助者は人間が飼っている鶏になる、という全体を通しての「意味」における隠喩があると考えられる。この隠喩的な物語をそのまま語れば、物語の発端でトッケビが村にやってくるという村の安全が危険に晒されるという欠如が生じ、結末ではトッケビは山奥へと逃げ帰るのであるから、村の安全を取り戻すという欠如が解消され、ダンダスや関の論に合致することになる。

では、なぜ原則通りに語らず、トッケビを主体にして欠如の継続を選んだのか。以下では、『こぶじいさま』を例に比較検討する。

3. 『こぶじいさま』の構造分析

(1) 梗概

むかし、額に大きいこぶのじいさまが、山へ木を伐りに行って日が暮れた。仕方なく、山のお堂に入り休むことにした。暫くして夜中ころ、山奥から鬼どもがやってきては、お堂の周りを歌って踊り始めた。最初は怖がっていたじいさまだったが、歌や踊りを見ているうちに楽しくなり、じいさまも鬼どもに混ざって歌い踊った。夜が明け、鶏が鳴いたので鬼どもは慌ててじいさまに明日も来い、と言いながら額のこぶを取り預かった。じいさまは喜んで帰った。翌日、同じように額にこぶのある隣のじいさまが真似をしてお堂に泊った。するとやはり夜中ころ、鬼どもがやってきて同じように歌ったので、じいさまもその輪に入った。めちゃくちゃに踊り、歌の続きを知らなかった。すると、鬼どもは怒って、昨日取ったこぶを隣のじいさまの額にうちつけた。こぶが2つになったじいさまは村へと逃げ帰った。

(2) 構造分析

『こぶじいさま』はよく知られている絵本であり、多くが周知の物語である。また構造分析も藤本朝巳(2005:125-174)が『昔話と昔話絵本の世界』で「こぶ取りじい」の語りの様式から丁寧に解説し、続いて絵本の文体、構造分析、さらには語りと絵本の相違まで述べている。その分析図(図3)を引用し、上記『さびしがりやのトッケビ』の構造分析と比較したいと思う。

上記『こぶじいさま』の構造分析の通り、第一のじいさんの欠如の解消がなされ、第二

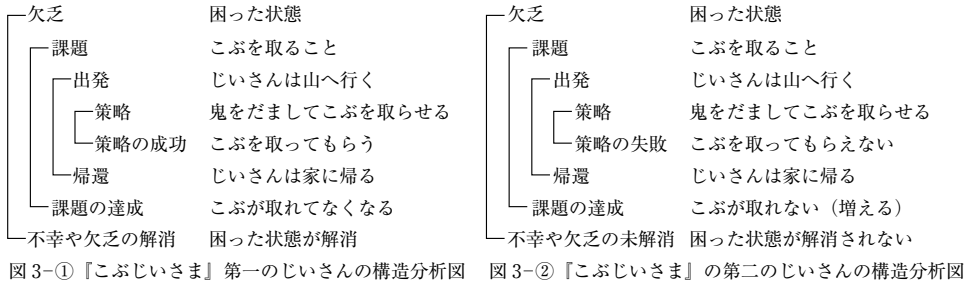


図 3 『こぶじいさま』の構造分析図

のじいさんの欠如が解消されていない。しかし、第一のじいさんと第二のじいさんのように二元的に語ることで、物語全体から見たら欠如の解消を見ることができる。つまり、『さびしがりやのトッケビ』のように隠喩的に語られておらず、昔話の本来の姿として二元的に顕在化しているのである。

また興味深いところは、『こぶじいさま』では夜明けを知らせるものとして、鶏が登場することである。どちらの物語においても鶏は大きな役割を担っており、『さびしがりやのトッケビ』では詳細に述べられてはいないが、鶏の登場が「夜明け」という隠喩的な意味も兼ね合わせているのであろう。

次に『さびしがりやのトッケビ』は第二のじいさんに相当する構造のみ語られているが、ここは昔話を語る語り手と関わっていると思われる。つまり、昔話が口頭伝承であることは先に述べた通りである。語り手と聞き手の応答によって「語り場」は形成されていたはずであるが、しかし昔話は大衆にすべて属していたとは言いきれず、語り手のもの⁷⁾であったのだろう。なぜならば、昔話は語り手の口から頭から生産される(語られる)ものだからである。こう考えるのであれば、二元的であったところを一元的に語ったのも語り手の意思によるところが大きかったのではないだろうか、と想像するのである。とするならば、それは朝鮮における「トッケビ」自体の特質／特性に深く関わるように思う。したがって、以下ではトッケビの特質／特性を先行研究によって概観し、鬼との違いを分析する。

4. トッケビの特質／特性

先行研究については、トッケビのものについては(1)で記述し、比較のために鬼のものを(2)で述べる。

(1) トッケビの先行研究について

トッケビについて、キム・サンハン(2008)は、まず朝鮮でトッケビとは民間信仰で信じられている超自然的な存在であり、獨脚鬼(ドッカッキュイ)、虚主(ホジュ)、虚體(ホチュエ)、魍魎(マンナン)などの名前で呼ばれる。人に対して肯定的な面と否定的な面の両面性を見せるが、人を殺害するほどの「悪」ではなく、人間の悪だくみに騙され超自然的な力を利用される愚かさを見せるところが特徴的である。上記のようにトッケビは様々な名で呼ばれるが、それは地域(方言)によりトッケビを異なった呼称で呼んだのであって、トッケビが持つ特質/特性が異なるからではない。

トッケビは、箒など人が使って放ったものが変化して生成されるとも言われ、動物の精霊や草木の精霊、器物の破片がトッケビとなる場合もあるという。また、トッケビは人気の少ない藪や人里離れた家に出現することが多い。

トッケビの多様な属性に合うようにその姿も様々であり、トッケビを表現したとする鬼紋瓦(キュイムンワ)はとても恐ろしい形をしている。邪気を取り除くという意味で頭にある角、大きく飛び出しそうな目、横に裂けている口、鋭い歯、毛が生えている体及び長い爪で表現されている。また、口承で伝えられているトッケビは実際の姿はなく、笑い声や泣き声及び炎などでその存在を暗示するのみの時もあれば、人の姿として現れる場合もある。したがって、親しみを込め隣の金ソバン(キムの旦那)と呼ばれることもあるという。

次に、韓国の絵本から現れたトッケビの姿を特に24冊の絵本から分析・考察したチェ・イェリン(2012)の研究がある。①外形的特徴と②人間との関係の特徴を調べたもので、①の外形的特徴については、裸足・大きな歯・大きな顔・髪の毛があり、服を着ていた場合は半ズボンであった。反面トッケビの能力を浮き彫りにする象徴的な道具であるこん棒は24冊中9冊しか現れなかったとしている。次にイメージについては、角や大きな歯があるにも拘らず、強面ではなく可愛く面白いイメージが絵本では強くなってきている、という分析結果であった。②の人間との関係の特徴については、さらに3つに分類しており、②-1両面性を持ったトッケビ、②-2人間と相互交流するトッケビ、②-3人間と遊びを楽しむトッケビの観点から考察している。結果としては、絵本に現れたトッケビの表象は多様であり、かつての文献にはトッケビを描写した絵がほとんど残っておらず、多くは文字によってその姿と性格が描写されていたので、トッケビの姿も描く人によって微妙に異なり、その姿は時代によって変化することになる、と述べている。

以上から、トッケビの特質/特性をまとめると様々な呼び名がり、人間の敵とは言えるものの、人間を害するまではいかず、人間に騙され利用される愚かなところがある。人間が放ったものに生成する場合もあれば、姿はなく声などでその存在を暗示する場合もある。ただ、伝承された姿としては、角があり、大きな目、鋭い歯や爪、毛が生えている。

人の姿として現れる時もある。絵本が描かれる時は、決まった様相はないのでさらに多様な形となり、描く人によって異なってくる。

(2) 鬼の先行研究について

鬼について、林鎮代（2011）は、人間社会に受け入れよう、互いに折り合って共存しようという発想はなく、退治すべき悪であり懐柔し利用すべき、または宝を手に入れるために騙すべき対象であり、あるいは他に手だてがないために仕方なく、一時的に受け入れたとしてもいつか滅ぼすべき敵と考えていた。

鬼を表現しているものとして「百鬼夜行絵巻」や村の地藏堂の天井に描かれている地獄図の中の鬼の姿を見ることができる。とがった耳の後ろに角を生やし、手足は牛のように二つに割れているように表現されている。

また絵本においては、一本または二本の角を頭に生やし、見上げるような大きな体や赤や青、黒の色をして毛深く、衣服は獣の皮を腰にまとっているというように描かれているものもある、と述べている。

以上から、鬼の特質／特性をまとめると、人間の「敵」としての性格が色濃く、利用すべき・騙すべき・滅ぼすべき対象である。伝承された姿としては角があり、手足は牛のように割れている。絵本に描かれる場合は、体が赤や青や黒として描かれるとしている。

(3) トッケビと鬼の相違

上記の先行研究から、トッケビと鬼は外形的な特徴に角があり、大きな図体などとても似ている。昔話として語られる「こぶ取りじい」は朝鮮においても酷似の話（崔仁鶴 1974：198-200）があり、そこに登場する歌や踊りが好きな輩はまさに「トッケビ」の集団なのである。また、興味深いことに金容儀（2006）によると、日本の『小学国語読本巻二』（1933、文部省編）に収録されている「瘤取り爺」の挿絵が、植民地時代朝鮮の小学校で使用された『初等国語読本巻二』（日本語、1939、朝鮮総督府編）に収録されている「瘤取り爺」の挿絵とまったく同じであることが取り上げられている。つまり、一方では「鬼」と言いながら、他方では「トッケビ」と言いつつ、同じ絵でそれを表現していたのである。これはあくまで時代的背景による創造された記号⁸⁾であって、トッケビと鬼の相違点は確かにある。前述した通り人々に受容されていたか、されていないかという側面は大きな違いであるとするべきであろう。なぜならば、この違いによって朝鮮ではトッケビを主体として、語り手は一元的に話を語ることにより、受容されていたトッケビを人々にさらに親身に感じられるように伝えたのではないだろうか。したがって、人々が放ったもの⁹⁾にトッケビを見ることができたのだろう。

このようにトッケビと鬼の本質的な相違から、特に『さびしがりやのトッケビ』を描いたハン・ビョンホのトッケビと『こぶじいさま』を描いた赤羽末吉の鬼はどのように表象されているのだろうか。

5. 絵本のトッケビと鬼

「はじめに」でも述べたように『さびしがりやのトッケビ』を描いたハン・ビョンホは「トッケビのハン・ビョンホ」と言われ、『こぶじいさま』を描いた赤羽末吉は「鬼の赤羽」と言われていた。それぞれについて述べたのち、絵本のトッケビと鬼について分析・考察する。

(1) トッケビのハン・ビョンホ

韓炳好（ハン・ビョンホ）は1962年韓国ソウル生まれで、秋溪（チュゲ）芸術大学校東洋画科で学び、子どもの本に良い絵を描くために尽力している。ソウルテヘラン国際原画展に出品し、第6回子ども文化大賞美術部門本賞を受賞し、1988年にはハン・ビョンホイラストレーション展を開催した。現在韓国出版美術家協会、ムジゲ（虹という意味）イラストレーション会員として活動中である。また、2005年にはプラティスラヴァ BIB 金のりんご賞を受賞している。作品は多数あるが、日本で紹介されている作品としては本稿で取り上げている『さびしがりやのトッケビ』を含め7作品翻訳出版¹⁰⁾されている。7作品の中でタイトルからトッケビと関連するものは3作品であるが、その他に『パンチョギ』（注10）-⑤）という作品もあり、これは「半分」という意味で、主人公が生まれつき一眼一足であったことから「4. (1) トッケビの先行研究について」の箇所でトッケビの名を述べる際、獨脚鬼（トッカッキユイ）というものがあると述べたが、脚が1つだけという意味であるならば、トッケビの性質を具有している可能性があるのではないだろうか。しかし、紙面上これを論じるのはまた別の機会としたい。日本で紹介されている作品以外にも、ハンはほぼ隔年のペースでトッケビの作品に何らかの形で関わっており、それぞれの作品のトッケビの様相が異なっている。大柄で粗野な姿の場合もあれば、猫やウサギのように毛並みの柔らかそうな可愛らしい姿の場合¹¹⁾もある。しかし、その特質／特性は形・姿とは真逆のパターンが多く、大柄で粗野な場合の方には優しさがにじみ出ており、可愛らしい姿の場合の方が冷徹で・身勝手な性格があらわれている。ハン・ビョンホの描くこのようなトッケビの二面性をもって、ひやりとするがなぜか情がわき深まってしまふと感ずるのである。2003年の出版ジャーナル¹²⁾のインタビューで「トッケビのハン・ビョンホ」と呼ばれるのが少し負担と語りながら、「トッケビの中でも、よく知られ

ていないものを語りたい。もっと勉強して、紹介したいという思いが切実なのです。」と
言っていたが、その2年後には、「過去の文献を調べてみるとトッケビの形は明確ではな
いが、いたずら好きで好奇心旺盛、しかし人を害することはない。いつも少し何かに欠け
ているので、却って人にやられる。トッケビは平凡な民衆の代弁者の役割をしている。貧
しく大変な民衆の抑圧を解放する役割。そういうところを念頭において絵を想像しま
す」¹³⁾ (波線筆者)。この想像は、「創造」とも読み換えられると筆者は思うのだが、トッ
ケビという得体の知れないものが、民衆の姿であるという方向性を見つけ、そこでハン
・ビョンホはトッケビを想像し、創造していると考えられる。『さびしがりやのトッケビ』
におけるトッケビは、これらインタビューの前に発表された作品ではあるが、ハン・ビョ
ンホの根底にある姿勢は変わっていない。人に声の掛け方がよく分からない不器用さを持
ち、人付き合いの苦手な、寂しさを感じている平凡な民衆の代弁者、それも時宜に合った
代弁者として表象されているのである。

(2) 鬼の赤羽

では、赤羽末吉の鬼はどうだろうか。赤羽の鬼については前述の藤本や赤羽茂乃 (2020)
が『絵本画家 赤羽末吉——スーホの草原にかける虹』で詳述している。そこで、筆者が
まず注目したいところは、赤羽末吉本人が述べた以下の点である。

「日本は妖怪の宝庫と言われている。ツララまでオバケにになってしまう。日本の湿気と
関係があると思うが、また日本人の想像力の豊かさともいえる。幽霊妖怪は人の心の
投影である。」(赤羽末吉 1983 : 55) (下線部筆者、以下同)

「ただコッケイな鬼なら、桃太郎など、なんで山越えてそんなもの退治しにゆくか分
からなくなる。大江山の酒吞童子にしても、そんな鬼なら、退治しても武勇でもなん
でもなくなる。そんなヌケガラの鬼を想像しながら、こうした話を聞いても、感動も
何もなくなる。」(赤羽末吉 1983 : 56)

鬼含め妖怪¹⁴⁾全般は日本の湿気、つまり風土と極めて深い関わりがあり、また人の心
を投影していること、さらには赤羽自身がヌケガラの鬼は退治に値しない鬼として様々な
鬼を想像し、それを絵として創造していたことに「鬼の赤羽」と言わしめた原点があるの
ではないだろうか。『こぶじいさま』の鬼は、うまく付き合えば、結果的にこぶが取れ、
鬼も逃げるように清々しく感じられる(図4-①: 鬼がじいさまのこぶを取り、鶏が鳴い
たので逃げる場面)ものではある。しかし、軽んじると追いかけてきて、こぶをもう1つ

うちつけられる(図4-②:鬼が追いかけてきて、こぶをうちつける場面)のような、日本の湿気とちょうど重なるように表象されているのである。



図4-①『こぶじいさま』12-13頁



図4-②『こぶじいさま』24-25頁

図4『こぶじいさま』該当箇所

(3) トッケビと鬼

「トッケビのハン・ビョンホ」及び「鬼の赤羽」のインタビューや文章を個々に読んでいるときは、さほど気がついていなかったが、両者を比較して読むことでトッケビと鬼の本質的な違いが浮かび上がる。つまり、画家は想像し、創造するところは同じであるがトッケビと鬼の根幹にある「もの」を鋭く捉えている。トッケビは人の代弁者であるので、人が持っている感情そのものをあらわし、また先行研究でも取り上げたように、人が使って放ったものにトッケビを見ることができるのである。他方、鬼は人の心を投影するも、人を取り囲む、もしくは作る環境そのものであると言え、友好的に付き合えば快適になるが、粗末に扱うと苛酷に一転するのである。この「もの」は、文化の最たる例である言語にも実は顕著にあらわれており、韓国／朝鮮語は対話する「相手」に合わせて言葉を変化させるが、日本語は対話する相手よりは「コンテキスト」¹⁵⁾を重視し言葉を変化させるのである。

6. おわりに

『さびしがりやのトッケビ』の発端の欠如が結末で解消されないところから、それはトッケビの特質／特性と関わることを述べ、その構造分析の一部を有する『こぶじい

さま』と比較分析を行った。2つの絵本の画家は「トッケビのハン・ビョンホ」,「鬼の赤羽」と呼ばれていることを通して、両者が考えているトッケビと鬼の性質が違う形として表象されることを明らかにした。ハンのいう民衆を代弁するもの、および赤羽の人の心を投影するが、それは日本の湿気など人を取り巻く環境と関係があるものであった。両国の昔話の中で同じ構造を有するが、その登場人物などが異なって現れるものが多く存在する。登場人物などが異なるのは様々な理由があると思うが、「トッケビ」と「鬼」の根底にある相違などと多くは重複するだろう、という仮説を立てることで次の課題へと論を進めていきたい。

注

- 1) 藤本朝巳 (2006: 148-149) は、「昔話を基盤としながら内容をパロディ化した異色な作品 (革新型) もある」と述べている。なお、本稿で取り上げる『さびしがりやのトッケビ』はこの革新型に属する創作昔話絵本である。
- 2) ハン・ビョンホ作・絵 (2006) 『さびしがりやのトッケビ』藤本朝巳訳, 平凡社。
- 3) 松居直再話／赤羽末吉画 (1980) 『こぶじいさま』福音館書店。
- 4) 31種類の機能とは、1 不在, 2 禁止, 3 違反, 4 偵察, 5 漏洩, 6 策略, 7 策略の成功, 8 加害・欠如, 9 仲介, 10 対抗開始, 11 出立・出発, 12 補助者の第一の機能, 13 主体の反応, 14 魔法の手段の取得・獲得, 15 目的地の移動, 16 闘い, 17 烙印, 18 勝利, 19 欠如の解消, 20 帰還, 21 追跡, 22 救助, 23 気づかれないでの到着, 24 偽の主体の主張, 25 難題, 26 解決, 27 主体の認知, 28 偽の主体の正体の暴露, 29 変身, 30 偽の主体の処罰, 31 結婚である。
- 5) 尹惠貞 (2019) 「日本昔話絵本と朝鮮昔話絵本の構造分析—絵本『かにむかし』と『あずきがゆばあさんとトラ』を中心に」, 一橋大学大学院言語社会研究科紀要『言語社会』13号, 355-372頁。
- 6) 本来ならば、補助者は「主体」の補助者であるはずであるが、『さびしがりやのトッケビ』においては、トッケビが主人公になっているので、反対者の「人間」に補助者として鶏が登場する。
- 7) 関敬吾 (1981: 170) 『関敬吾著作集5 昔話の構造』同朋舎出版。
- 8) 朴美暎 (2015: 87) によると、「日本のオニの視覚のイメージは豊かであり、相対的に乏しかったトッケビの視覚イメージの穴を埋めるために参照されたものであると考える方が妥当」としている。
- 9) 崔仁鶴 (1974: 224-225) によると、「トッケビ」という昔話が紹介されているが、語られた内容の中では「トケビ」(原著のママ) という語彙は使われず、背が高く体の大きい泥棒が登場し、この泥棒を倒すとうきになってしまった、というふうに記されている。最後の解説で、「泥棒がほうきになったということは、一般にトケビのいたずらだと受け止めている。」と記されている。
- 10) ①チョン・チャジュン文, ハン・ビョンホ絵 (2003) 『トッケビのこんぼう』ふじもとともみ訳, 平凡社。
 ②イ・サン文, ハン・ビョンホ絵 (2004) 『うしとトッケビ』おおたけきよみ訳, アートン。
 ③チョン・ハソプ文, ハン・ビョンホ絵 (2004) 『へちとかいぶつ』おおたけきよみ訳, アートン。

- ④イ・サンクォン文, ハン・ビョンホ絵 (2004) 『パパといっしょに』 おおたけきよみ訳, アートン.
- ⑤ソ・ジュンエ文, ハン・ビョンホ絵 (2006) 『パンチョギ』 かみやにじ訳, 少年写真新聞社.
- ⑥チェ・ジョンソン文, ハン・ビョンホン絵 (2012) 『あかちゃんがびたっ』 チャン・ヨンス訳, ブロンズ新社.
- 11) 前掲註 10-②『うしとトッケビ』に登場するトッケビがまさに猫のように可愛く描かれている.
- 12) The Korean Publishing Journal, Monthly (출판저널) (2003: 114-115) Serial No. 329.
- 13) プレシアン (프레스리안) 作家インタビュー (2005) <https://m.pressian.com/m/pages/articles/47529#ODKW> (2024年2月6日最終検索).
- 14) 小松和彦 (2015: 42) は、「妖怪という言葉は、怪しい存在 = 不思議な存在を指し示す言葉で、近代になって作り出されたもので、「神」と対比される概念・用語ではない。鬼も神の一種であった」としている.
- 15) 井手祥子 (2006: 30) は、「日本はいわゆる高コンテクストの文化であるため、話す時には話し手はコンテクストに支配されることが多い。(…)話し手は、場をどのように捉えているかについての命題の付加情報として表現することで話を成り立たせている。」と述べている.

参考文献

〈日本の文献〉

- 赤羽茂乃 (2020) 『絵本画家 赤羽末吉—スーホの草原にかける虹』 東京: 福音館書店
- 赤羽末吉 (1983) 『絵本よもやま話』 東京: 偕成社
- 井手祥子 (2006) 『わきまへの語用論』 東京: 大修館書店
- 金容儀 (2006) 「女界灘を渡った鬼のイメージ: なぜ韓国のトッケビは日本の鬼のイメージでかたられるのか」 日文研フォーラム 190, 1-27 頁
- グレマス・A/J (1988) 『構造意味論』 田島宏, 鳥居正文訳, 東京: 紀伊國屋書店
- 小松和彦 (2015) 『妖怪学新考 妖怪から見る日本人の心』 東京: 講談社
- 関敬吾 (1981) 『関敬吾著作集 5 昔話の構造』 京都: 同朋舎出版
- 谷本誠剛/灰島かいり編 (2006) 『絵本をひらく—現代絵本の研究』 京都: 人文書院
- ダンダス・アラン (1980) 『民話の構造』 池上嘉彦訳, 東京: 大修館書店
- 崔仁鶴編著, 関敬吾監修 (1974) 『朝鮮昔話百選』 東京: 日本放送出版協会
- 林鎮代 (2011) 「象徴としての“鬼”と“トッケビ”—子どもに語る昔話から」 『関西国際大学研究紀要』 第12号, 25-35 頁
- 朴美暎 (2015) 『韓国の「鬼」トッケビの視覚表象』 京都: 京都大学出版会
- 藤本朝巳 (2005) 『昔話と昔話絵本の世界』 東京: 日本エディタースクール出版部
- プロップ・ウラジーミル (1983) 『昔話の形態学』 北岡誠司, 福田美智代訳, 東京: 白馬書房
- 尹惠貞 (2019) 「日本昔話絵本と朝鮮昔話絵本の構造分析—絵本『かにむかし』と『あずきがゆばあさんとトラ』を中心に」 『言語社会』 13号, 355-372 頁

〈韓国の文献〉

- 김상한 (2008) 「한국 도깨비 이야기와 일본 요괴 이야기의 비교 연구」 『한국아동문학연구』 14, 263-297
- 최예린 (2012) 「한국 그림책에 나타난 도깨비 분석 형상과 인간과의 관계를 중심으로」 『어린이문학교육연구』 13(3), 307-324

